

主 題：深遠なる神の憐れみ 4

聖書箇所：ヨナ書 4章1-11節

ヨナは信仰的な人物です。神がヨナを選ばれたのには理由がありました。しかし、ヨナは失敗します。そのヨナに神は大切なレッスンを与え教えて行かれます。それはまた、私たちにも大切な教訓です。

ニネベの人々が救われるという大きな奇蹟が起りましたが、ヨナには喜びがありませんでした。かえって、神に対して怒りをもったのです。

1. ヨナ自身の失敗 1-5節

1節の初めに「ところが」とあります。神の偉大なみわざが現わされたのに、ヨナにはニネベの人たちの救いが喜びではありませんでした。イスラエルを苦しめたアッシリヤ、自分たちの敵であるニネベの人たちが救われたことをヨナは受け入れられなかったのです。2節にはヨナの祈りがありますが、「ああ、主よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。」「神よ、私は言いましたよ！」と自分の思いを神にぶつけています。ヨナには神のみこころに従順に従っていこうという思いがないのです。本当は「ニネベの人たちを愛すること、それは私には難しいことです。どうぞ、神よ助けてください。あなたのみこころとおりに私の心を添わせてください」という祈りが正しかったはずですが、ニネベの人たちの救いを望んでいなかった、これがヨナの本心だったのです。1節に「不愉快にさせた」とありますが、不愉快な思いがヨナを支配したということです。怒りをもつとそれがどんどん熱くなり燃えるようになります。自分の思いどおりにならないことへの不満、それは、ずばり罪が原因です。そして、その罪を放っておくと心の中は不満でいっぱいになるのです。罪を悔い改めないゆえに、それがますます大きくなってゆくのです。

2-5節には、ヨナの失敗の過程を見ることができます。

(1) 自分が正しいと思う。自分の思いを神のみこころより優先させるのです。そのために神への愛が不完全です。2節の後半に「私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわいを思い直されることを知っていたからです。」とヨナは正しい神観をもっていたことを見ます。しかし、知識ではないのです。神への恐れ、尊敬がありません。神の前に謙虚になれないのです。もし、私たちの心の中に神への不満があるなら、自分を吟味することが必要です。そして、神だけでなく、隣人への愛も枯れてゆきます。心から愛することができないのです。ヨナはニネベの人たちの最善=救い=を望まなかったのです。自己中心には愛が育たないのです。次に、

(2) 自分の罪を正当化します。神に逆らっているその自分の行為を他人のせいにするのです。ヨナは言います。「私は初めタルシシュへのがれようとしたのです。」と、私は間違ったことをしようとしたではありません、と主張します。心に罪があると、その罪を正当化しようとし、責任転嫁です。

(3) 神への脅迫が起ります。3節「どうぞ、私のいのちを取ってください。」とヨナは言います。自分の思いどおりにならないのだったら死んだほうがましだと。そのヨナに神はこう言われます。4節「あなたは当然のことに怒るのか。」と。ヨナは自分の怒りが当然だとしているからです。5節にヨナは「町の中で何が起るのかを見きわめようと、」と町の様子を見ていようとします。神がニネベをさばかれるのを見ていようと…。私のこれほどの怒りを神は聞き入れて私の願うことをしてくださるから、というのがヨナの心の状態でした。

神に用いられたにもかかわらず、ヨナはこのように失敗を犯してしまいます。私たちはヨナに自分自身を重ねて見ることができます。自分の思いどおりにしたいと願うとき、それがかなわないと神への不満が満ち、そして、怒りが心を支配します。「どうしてですか？なぜですか？」と。そして、自分の不従順を神のせいにして、そこには何の喜びもありません。救われた私たちはつねに、神のみこころに自分の思いを添わせること、これが、私たちが学ぶべきことです。

2. ヨナへのレッスン 6-11節

失敗を犯したヨナを神は見捨てることなく、大切なことを教えて行かれます。6-9節「神である主は一本のとうごまを備え、それをヨナの上をおおうように生えさせ、彼の頭の上の陰として、ヨナの不きげんを直そうとされた。ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ。しかし、神は、翌日の夜明けに、一匹の虫を備えられた。虫がそのとうごまをかんだので、とうごまは枯れた。太陽が上ったとき、神は焼けつ

くような東風を備えられた。太陽がヨナの頭に照りつけたので、彼は衰え果て、自分の死を願って言った。『私は生きてより死んだほうがましだ。』すると、神はヨナに仰せられた。『このとうごまのために、あなたは当然のことに怒るのか。』ヨナは言った。『私が死ぬほど怒るのは当然のことです。』。神は「ヨナの不きげんを直そうとされた」とあります。これは不きげんをなだめるというのではなく、直訳で「不きげんから救い出そうとされた」とあるように、問題から、また敵から解放する、救出する、回復する、そして、罪や罪悪感からの解放という意味で使われることばです。神はヨナを彼の間違いから救い出して、正しい方向へ導こうとされたのです。神がヨナのために備えられたものは、「とうごま」「一匹の虫」「東風」です。とうごまによって日陰を得たヨナですが、一匹の虫によってそのとうごまは枯れてしまい、焼けつく東風と太陽でヨナは衰え果てます。これらのことの背後には神がおられ、ヨナが学ぶようにと備えられたのです。しかし、この中でヨナが神に言ったことは、「私は生きてより死んだほうがましだ。」でした。3節と同じことばです。ヨナと同じ心の状態、同じプロセスを見ます。ヨナは再び、自分の思いどおりにならないから神に対して怒りをもちます。神がどのようなお方かを知っているのに、自分の思いどおりに物事が進まないから、神に対して不満をもち、神に怒りをもつのです。私たちも同じではないでしょうか？

神がヨナに教えようとしたこと、それは10,11節に見られます。ヨナへのレッスンです。「主は仰せられた。『あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜しんでいる。まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。』」。神はとうごまとニネベの人々を対比して言われます。ヨナよ、あなたは大きく成長して自分のために日陰をつくってくれたとうごまを愛したのではないか、しかし、それが枯れてしまったとき、そのことを惜しんだでしょう？あなたはとうごまが成長するために何かしたか？何もしなかったでしょう？にもかかわらず、あなたは今、とうごまが枯れたことを惜しんでいるのではないか、実はその憐れみの気持ちをあなたに学んでほしかったのだよ、と。そして、あのニネベには神を知らない多くの罪人たちがいる、ニネベの人々を造ったのはこのわたしだ、わたしが愛しているニネベの人々が罪を悔い改めて救われることを、わたしはどれほど望んでいるか、彼らが神を知らずに滅んでしまうこと、永遠のさばきである地獄に行ってしまうことがわたしにとってどれほど悲しいことか、あなたは気付かないのか？と。とうごまよりもいのちのあるこの人間たちを憐れむのだと、神はご自分の民であるニネベの人々への愛を、ヨナに教えられたのです。罪人の永遠のさばきを神はご存じだから、救われていない人々への愛を示されるのです。

II ペテロ3:9にはこのようにあります。「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」と。私たちはこのような思いをもって、すべての人に接しているでしょうか。ひとりでも滅びることを望んでおられない、これが神のみこころなのです。神は忍耐して待ってくださっています。恵み深い、憐れみ深い神は、一人でも多くの人々が救われることを望んでおられます。神は私たちをニネベに遣わされます。私たちはこの神の思いを自分の思いとして出て行くのです。人々に悔い改めて神の救いを受けようとしてと語ることです。それが神が私たちに求めておられること、望んでおられることです。そして、神はこのことをヨナに望まれたのです。ヨナは神の憐れみによって救われたのですから、憐れみの思いをもってニネベの人々の救いのために労するべきだったのです。